

第31回特別展 移管資料展(6)
「染—しぼる、ふせる、おく—」

川本 利恵*¹

はじめに

令和元年度は、移管資料展の第6弾として、第31回特別展「染—しぼる、ふせる、おく—」を、令和元(2019)年10月8日(火)～10月24日(木)の期間、千代田三番町キャンパス(以下、「三番町」という。)1号館ロビーにおいてプレ展示として、11月5日(火)～令和2(2020)年2月7日(金)の期間、本展示として町田キャンパス(以下、「町田」という。)生活文化博物館にて開催した。

この企画は平成26(2014)年から続く、旧東京家政学院短期大学(以下、「短大」という。)の研究室所蔵資料による移管資料展の第6弾であり、シリーズ展示の最後の展覧会になる。今回は、工芸染色研究室の資料の中から絞り染、型染、ろうけつ染といった染織資料を中心とした。短大当時工芸染色研究室に所属していた佐々木麻紀子助教(以下、「佐々木先生」という。)に協力を仰ぐことになった。

1. 資料の整理

工芸染色研究室の資料は、短大が廃止となったとき町田へ送られ、大江記念ホール棟4階の教員研究室の空き部屋に平成22(2010)年度から保管していた。その際に資料リストと資料写真のコピーもいただいていた。

展示するときには燻蒸をしてからと考えていたので、平成30(2018)年8月に学院史関係の資料を保管するための旧書道教室を使用して燻蒸を行い、燻蒸後は旧書道教室および旧書道研究室内に収納した。

2. テーマの決定

佐々木先生とは、当館の企画展でも協力していただいていたので、特別展について声掛けをしていた。資料を燻蒸したときに中身を改めていたので、ある程度内容の把握もできていた。

5月7日(月)に佐々木先生との打合せを行った。主にどのような構成にするのかを話し合った。資料の多くは学生に見せるために授業や卒業研究の内容に沿ってその都度購入されており、系統立てて収集されたものではないとのことだった。それらをおおまかに分類するとすれば技法で分けるしかないということになった。そのため、今回は染色技法をテーマとした。

また、KVA祭(大学祭)でのギャラリートークとともにワークショップや公開講座を行いたいと伝えた。ワークショップは長くても30分くらいで作品が完成させられるもの、公開講座は、当時の教員のどなたかに講義をしていただき、その後展示を見学するという形式にしたい旨を説明した。

3. 展示構成

6月17日(月)に山村明子(現代家政学科教授)館長(以下「館長」という。)を交えて三番町で打合せを行った。展示資料リストと特別展開催までのスケジュール表をもとに印刷物の大まかな原稿内容、提出期限を、また資料写真を見ながら、技法別に4部構成にする旨を説明した。タイトルも決めることになり、染色の「染」の1字をとり、副題としてそれぞれの技法の動作から、「しぼる」、「ふせる」、「おく」をつけて、「染—しぼる、ふせる、おく—」とした。

ワークショップについては、佐々木先生から型染であれば可能であると提案があり、KVA祭で行うのであれば、時期的にクリスマスカードや年賀状であれば持ち帰って使用できるので採用となった。絵柄は簡単に作業しやすいものを佐々木先生に選んで購入してもらうことにした。回数は、午前にギャラリートークを入れるので、11月9日(土)の午後に1回、10日(日)の午前と午後に1回ずつ、計3回とした。時間については後日決めることにした。

公開講座については、前回の打合せ後に佐々木先生

*川本 利恵(かわもと りえ) 令和元年度生活文化博物館学芸員

が当時の先生方に連絡を取ってくださったのだが、亡くなられていたり、体調が思わしくないとのことで、今回は取りやめることにした。

最終的な展示資料は、有松鳴海絞染浴衣や羽織等、天然染料や藍染絞り作品が18点、江戸更紗、小紋、型紙等が5点、ろうけつ染、インドネシアバティック、ろうけつ染道具等が37点、染色道具等が14点、授業教材、参考作品等が10点となった。

構成は下記の通りである。

- 第1部：絞り染
- 第2部：型染
- 第3部：ろうけつ染
- 第4部：その他の技法

4. 印刷物

7月8日（月）に旧書道教室で、佐々木先生の指示を受けながら撮影予定の資料を出して、時折資料の裏表や撮影の向き、全体を撮るのか部分にするかなどを聞きながら順番に並べた。中でも折皺などが目立つものを指摘していただき、その資料についてはアイロンがけをすることにした。基本はリスト順だが大きな資料は順不同に広げた状態のまま重ねていった。最後に全体を薄様で覆い撮影に備えた。

2日間の予定で印刷所にカメラマンの手配を依頼し、7月22日（月）・23日（火）に写真撮影をした。1日目に1時間延長したが、2日目は意外にスムーズに進み2時半には撮り終えることができた。

撮影済みの資料は、また同じ位置へ戻し、展示作業が始まるまで薄様を掛けた状態のまま保管することにした。

（1）チラシ

昨年からポスターをなくしてチラシのみとした。発行部数は例年通り3000枚とした。チラシの表には展示資料から1点を配し、チラシの裏面にはあいさつ文と展示資料の一部を掲載した。原稿の取りまとめに際し、ギャラリートークおよびワークショップの時間を決め、8月29日（木）に入稿し、9月30日（月）に納品となった。

昨年と同様、表には今回も一つの作品を大きく見せる手法とし、模様が印象的な絞り染作品を選んだ。全体を入れ込むのではなく、より模様がわかるように、一部分を拡大するような構図とした。（写真1）

チラシの裏面（写真2）は、あいさつ文と技法別の資料写真4点、町田・三番町両キャンパスの地図を配した。



写真1 チラシ表面

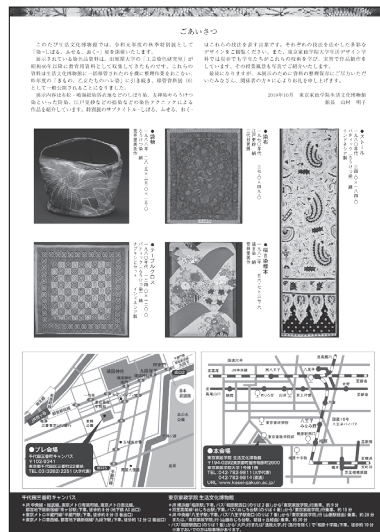


写真2 チラシ裏面

（2）展示目録

目録の表紙（写真3）には、白地の中央に1点だけ大きく資料写真を載せることとし、色鮮やかな江戸更紗のテーブルセンターを選んだ。

内容は、あいさつ文、染色資料（写真4）、工芸染色研究室の資料の説明、染色技法の概説という形式とした。資料の説明と概説は佐々木先生へ依頼した。

8月29日（木）に入稿し、10月4日（金）に1,000部納品となった。納品後内容の確認をした際に、技法名に誤りが見つかり、正誤表を作成して差込みをした。

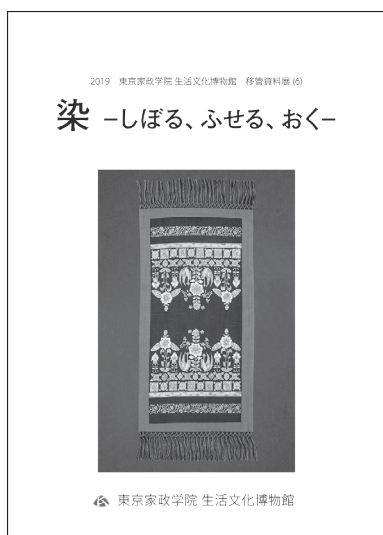


写真3 資料目録表紙

10月25日（金）にプレ展示の片付けを行い、資料は町田に返送した。展示ケースは次の利用者のために空のままにし、向かい側の垂れ幕の前に机を移動し、本展示の会期が終了するまでそのままにした。



写真5 展示のようす

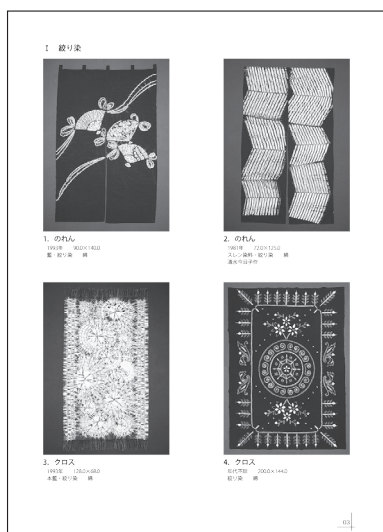


写真4 絞り染資料



写真6 展示スペースの向かい側

5. 展示作業

(1) プレ展示

チラシは9月30日（月）、解説パネルと垂れ幕、展示目録ともに4日（金）に納品だったため、学内便で三番町へ送った。翌週10月7日（月）に展示作業を行った。三番町の1号館ロビーには常時2台のレンタル展示ケースが設置されており、浴衣地、着尺地、バッグなど5点を展示した。ケース裏の壁面にはあいさつ文のパネルと技法の概説パネルを2枚、額装した資料を掛けた。（写真5）また、展示ケースのそばに机を置いてもらい、チラシと展示目録を置いた。机の前には、チラシの表を大判コピーしたものをポスターとして貼った。展示ケースの向かい側には垂れ幕（写真6）を掛けた。

(2) 本展示

プレ展示が開催されている間の10月21日（月）から、本展示会場である町田の博物館展示室での作業が始まった。まず企画展の片づけを行い、10月23日（水）から展示作業に入った。

当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大きさの「柱ケース」と称する4種類の展示ケースがあり、それぞれのケースへ資料を振り分けていく。

展示室の入り口に入って壁面にのぞきケース2台を置き、絞り染のクロスを飾り、ケース上の壁面空間には入口側に解説パネルを掛け、窓側にのれんを2点掛けた。（写真7）窓側の中ケース1台に一番大きなクロスを掛けた。柱を挟んで窓側に中ケースを2台、柱ケース1台、大ケースを1台並べ、最初の中ケースに

は絞り染の着尺地、帯揚げ、サリー、ネクタイを、次の中ケースには浴衣と羽織（写真8）を飾った。これら資料は生地が縮んだままの状態、仕立てるには皺を引き伸ばさなければならない。その作業には、昭和40年代頃まで、湯熨斗釜（ゆのしがま）が使われていた。それは蒸気を当てて布のしわを伸ばしたり、幅を整える「湯のし」のための釜で、湯をわかすと筒状の先端から蒸気が噴き出るといふもので参考資料として展示した。柱ケースには絞り染用の糸と縄芯を飾った。大ケースからは型染資料になり、江戸更紗の長着（写真9）を掛けて飾った。そこから直角に曲がり、柱ケースに染布とテーブルセンターを配し、続く大ケースに江戸小紋の訪問着を衣桁に掛けて飾り、また次の柱ケースに江戸極々鮫小紋の着尺地と参考資料として鮫小紋の型紙（写真10）を置き、鮫小紋の細かさの違いがわかるように虫メガネを設置した。さらに直角に曲がり、中ケース4台を置き、1台にろうけつ染のスカーフやネクタイ、帯やバッグ（写真11）を飾り、残り3台にはジャワ更紗やバティックといわれるハンカチやストール、染布（写真12）などを飾った。それに向かい合う壁面には額装された描き染標本と工芸染色研究室所属の先生の写真パネルを飾り、棚には研究室所属教員著作教科書と学生の課題作品や卒業制作作品の写真を取めたアルバム（写真13）を参考資料として置き、自由に見てもらうことにした。

中央に大ケース1台と中ケース1台を並べその裏にのぞきケース2台を背中合わせに配置し中ケースとのぞきケースが合わさった部分と背中合わせにさらにのぞきケース1台を配置して島を作った。大ケースには友禪染の訪問着を衣桁に掛けて飾った。中ケースには大和貝紫の染料で染めたストール（写真14）や同じ染料で染めた首里花織のストール、茜染のショールを飾った。ショールの素材である絹は天蚕とよばれる貴重なもので、いろいろな種類の繭玉と大和貝紫の説明文を参考資料として展示した。続くのぞきケースには友禪染の半衿、辻が花染の帯揚げ、ほかし染のネクタイを飾り、中ケース裏ののぞきケースには洗い張りの見本と仕立て見本の布地、ふのり（写真15）を飾った。工芸染色研究室では洗浄についての授業や研究も行っていたため、その資料として展示した。大ケース裏ののぞきケースには、ろうけつ染の道具で模様が彫りこまれたチャップとろうをのせるためのチャンチンを展示した。また背中合わせすることでできた背面の空間にバティックのクロスを掛けた。（写真16）それに向かい合う壁面には額装された描き染標本（写真17）を展示した。



写真7 入口側の壁面の様子



写真8 有松絞りの作品と湯のし釜



写真9 江戸更紗長着



写真10 極々鮫小紋着尺地と鮫小紋型紙



写真11 スカーフ、帯など

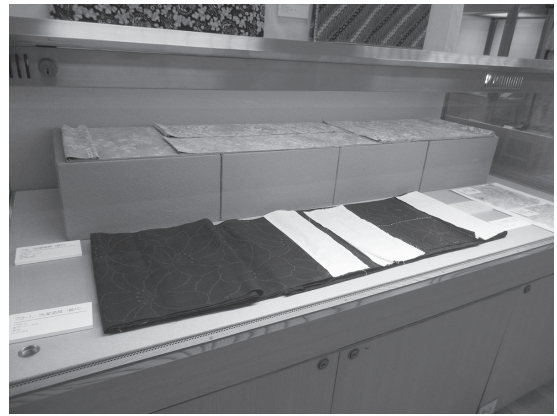


写真15 洗い張り・仕立て見本



写真12 クロス、染布、ストール



写真16 ケースの段差を利用して飾ったクロス



写真13 学生作品のアルバム



写真17 描き染標本



写真14 大和貝紫染の大判ストール

(3) 来館者参加コーナー

大学周辺から東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の一部を含む範囲とした地図を拡大パネルにし、そこに「どこからいらっしゃいましたか？」とタイトルをつけて自宅の場所にシールを貼ってもらうことにした。このコーナーも5年目を迎える。地図の範囲以外の地域を関東、中部、関西などと区切って表示した。(写真18) タイトルを読んでもくれると貼ってくれる人が多く、家族や友達同士で場所を探しあうなど楽しそうな姿がみられた。

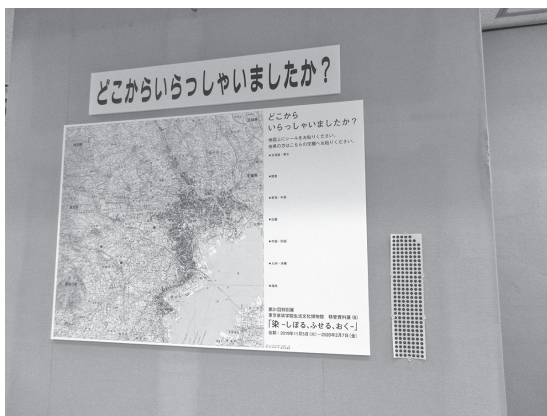


写真18 近隣圏地図

6. 広報活動

本学教職員には、チラシや資料目録を配布し、学生には本学構内にポスターを掲示して周知をはかっている。また、エントランスの管理棟の入り口と第3号棟の入り口、附属図書館の入り口に垂れ幕を掛けた。なお、各新聞社、博物館、各県の教育委員会などの関係機関へチラシ、資料目録の配送を行った。

今回は、地域情報誌「ショッパー」の11月8日（金）号と、令和2（2020）年1月21日（火）朝日新聞朝刊多摩版「多摩マリオン」に特別展の紹介記事が掲載された。

7. 特別展開催

10月8日（火）にプレ展示がオープンし、展示場所がロビーということもあり、学生が行きかえりに立ち止まって見ていく光景が多くみられた。

本展示がオープンした週末はKVA祭（大学祭）が開催され、11月9、10日（土、日）の2日間にわたり多くの方に見ていただいた。土曜日には午前11時から佐々木先生によるギャラリートーク（写真19）が行われた。参加された皆さんは熱心に聞いてくださり、ときおり質問がでるなどして1時間ほどで終了した。



写真19 KVA祭ギャラリートークの様子

また、計3回の型染でクリスマスカードや年賀状を作るワークショップを行った。1回目は土曜日の午後1時半から2時半まで、2回目は日曜日の午前11時から12時まで、3回目は午後1時半から2時半までである。佐々木先生には、クリスマスカード用にろうそくや柗の葉など、年賀状用に梅花や干支のネズミなどの型紙を用意していただいた。水を使っても大丈夫な部屋が必要だったため、展示室と離れた場所にある教室が会場だったが、どの回も幅広い年齢層の方々にご参加いただいた。（写真20）



写真20 ワークショップの様子

おわりに

今回は移管資料展の最終回ということで、これまで6回の展示に携わってきたのだが、筆者自身はよく知らない世界のことばかりで、協力していただいた先生方に教わりながらの日々だった。このような仕事をしていなければ半端な知識のままで終わっていたらと思うと貴重な経験をさせていただいていると改めて感謝の念を覚えた。

これまで、そして今回来館された皆さんにも、新たな興味や関心をもつ機会としていただけたなら幸いであった。

今回、多大なご協力をいただいた佐々木先生ほか、特別展にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

なお、「工芸染色研究室」の名称は、平成23（2011）年に東京家政学院短期大学生活科学科が廃止になるまでに学科名変更やカリキュラム変更により「衣類整理研究室」「被服整理研究室」「被服管理・染色研究室」「工芸染色研究室」と研究室名が変更されているが、今回の展示では、短期大学での最終名称となった「工芸染色研究室」で統一した。